

2022年10月16日（日）「現代芸術が探し求めた『神のかたち』」

創世 1:26-27

神は言われた。「我々のかたちに、我々の姿に人を造ろう。そして、海の魚、空の鳥、家畜、地のあらゆるもの、地を這うあらゆるものを治めさせよう。」神は人を自分のかたちに創造された。神のかたちにこれを創造し、男と女に創造された。

昨日と今日、二日に亘って「ホンダマモル展」を開催させていただいております。チラシの中では紙面に限りがあったため最小限の内容しか書けませんでした。本当はいろいろとお伝えしたいことがありました。2020年に入ってからコロナで自粛生活が求められ、教会の活動スタイルも大きな変革が必要になりました。礼拝や祈祷会のオンライン化が早急の課題となり、駆け出したばかりだった活動が次々と停止状態になり、気持ち的に滅入っていた日々を思い出します。ある日ふと教会から外の遊歩道を眺めていたところ、以前よりもずっと多くの人が行き来しており、マスク姿の人々が行動できる場所を求めて散歩やマラソンに勤しんでおられる姿が目にとまりました。困難な時代を懸命に生きようとしておられる人々のために、教会として何かできることはないかと考え始め、妻と話し合いました。当初妻に墨で御言葉を書いてもらい掲示板に貼り出すことも考えたのですが、文字だけではなくパッと目に入る印象的なもの、それでいて心に慰めを与えてくれる何かがいいということになり、絵を飾るのはどうだろうかという結論に至りました。私が絵を描けばいいのですが、残念ながらそのような能力がないので、さてどうしようかと考えておりましたところ、以前から大切にしてきたホンダマモルさんの『日めくりカレンダー』を思い出したのです。そこで作者ご本人の了解を得て、毎日文字通り「日めくり」で掲示させていただきました。毎朝ティラナスホールの小林兄妹にお手伝いいただいていたのを思い出します。その後も今に至るまでこの活動を細々と継続してまいりまして、この度マモルさんご本人をお迎えすることができたという次第です。

マモルさんと私は東京基督教大学に一緒に入学した仲で、マモルさんは美大を出られてから来られましたので少し年齢的には上なのですが、先輩後輩もなく優しく接してくださいました。時々学内通信に載せてくださる4コマ漫画がかわいくて、いつも楽しみにしていました。心が繊細な方で、4年間の大学生活の中で辛いことがあった時期にカブトムシを飼っていたというお話など、卒業チャペルのときに印象深く聞かせていただいたことがあります。卒業後、14年間牧会をなさっていましたが、その一年目あたりだったと思います、当時私は神学校の音楽科に進んでいましたが、マモルさんが仕えておられる教会の祈祷会に少し参加させていただいておりました。そこで、毎回ホワイトボードに絵を描いて、「信仰偉人伝」というシリーズでお話くださったのも、とても良い思い出となっています。また、浦和レッズの大ファンという一面もあり、私が知らないことも含めて「ホンダマモルさん」という方を形成しているということを感じながらここまで関わりを持たせていただいていたまいりました。おそらく、絵に込められたメッセージに耳を傾けてみるのが一番マモル

さんを知る機会になると思っております。今日も午後の展示会の中でトークの時間も設けさせていただいており、昨日とはまた違ったお話を伺えると思います。

さて、今日はいつもと少し違った角度から説教をさせていただきたいと思います。画家をお招きしますので、ここ数ヶ月の間、私なりに絵画と思想について学んでおりました。各時代に現れた芸術や文学は「時の思想」を反映しており、その時代に人々が持っていた哲学や価値観、それに裏づけられた歴史的出来事を表現する手段となっています。私は思想と芸術の関係にはずっと深い関心を寄せてまいりました。この説教のために、アメリカの神学者であったフランシス・シェーファーの『それでは如何に生きるべきか』という本を読んでいる中で、特に興味深かったのは「現代の美術、音楽、文学、映画」という章でした。今日はその内容にふれながら、芸術が追い求めているものに御言葉はどう答えているかを考えてまいります。

「現代美術」と聞くとときに、どのような画家を思い浮かべるでしょうか。まず、印象画家の筆頭としてクロード・モネ（1840-1926）、ピエール・オーギュスト・ルノアール（1841-1919）の名前が挙げられます。次にカミーユ・ピサロ（1830-1919）、アルフレッド・シスレー（1839-1899）、エドガー・ドガ（1834-1917）といった人々が続きます。

「これらの人々は皆偉大な画家であった。彼らは、目が彼らにもたらすもののみを描いた。しかし一方、目に達する光の波の背後に実在があったのかどうかという疑問を残した。彼らはそれを“自然に従う”と呼んだ。」(p. 181)

「1885 年以来、モネはこういう考えをその論理的帰結にまで持ってきた。そして実在が夢になってしまうような方向に近づいた。これは例えば、モネの一連のポプラの絵、「ジヴェルニのポプラと日の出」(1888) と「エプト河畔のポプラ並木」(1890) の中に見ることができる。実在が夢になってしまうような方向に近づくにつれ、運動としての印象派は下火になり分裂していった。」(p. 181)

「次にこの派の人々は実在に、そして個々のものの背後にある絶対に戻る方法を見つけて、その問題を解くことを試みた。彼らは後期印象派と呼ばれた。彼らは普遍的なものの欠如を感じなんとかしてその問題を解決しようとした。そして結局は失敗した。」(p. 181)

「後期印象派の大画家達は、ポール・セザンヌ（1839-1906）、フィンセント・ファン・ゴッホ（1853-1890）、ポール・ゴーギャン（1848-1903）、そしてジョルジュ・スーラ（1859-1891）である。」(p. 181)

この時代を特徴づけるのは「悲観主義」「断片化」という言葉ですが、後期印象派のデビッド・ダグラス・ダンカン（1916-2018）の表現を借りるならば「破滅した世界に対す

る予言」(p. 182)とも言える世界観と言われます。作品の中に描かれる人間の姿は、「人間性が完全に失われ」(p. 185)ており、ルネサンス時代の煌びやかな人間の理想像とは真逆の人間観が映し出されています。有名な、パブロ・ピカソ(1881-1973)の「アヴィニヨンの娘たち」では、「人々は人間以下のものになってしまった」と。「断片化された世界と断片化された人間」(p. 182)という概念を技巧として表した時代なのです。私はここで言われている「断片化」という言葉の意味がなかなか掴めなかったのですが、調べてみると、どうも「いろいろな角度から見た物の形を一つの画面に収めること」のようです。

どこかでお話する予定ではありますが、ルネサンス(14-16世紀)というのはヒューマニズム的希望に満ち溢れた時代であり、有名なダビデ像に代表されるように、人間の理想の姿がミケランジェロやダ・ビンチのような屈指の芸術家たちによって描き出されました。しかし、ヒューマニズムという言葉のとおり、この思想の背後には「人間至上主義」というものがあり、神なしに偉大になろうとする人間の姿が極められようとした時代であったとも言えます。この無神論的な世界観は脆くも崩れ去ったのですが、時を経て今度は絶望的な人間観へと進んでいったと言えるでしょう。

先ほど朗読していただいた聖書箇所は、創世記1章の人間創造の記事ですが、ここでは「神のかたち」として造られた人間の尊厳が描かれています。

神は言われた。「我々のかたちに、我々の姿に人を造ろう。そして、海の魚、空の鳥、家畜、地のあらゆるもの、地を這うあらゆるものを治めさせよう。」神は人を自分のかたちに創造された。神のかたちにこれを創造し男と女に創造された。(創世 1:26-27)

「神のかたち」とは何かということにおいてはいくつかの代表的な見解があります。

第一に「人格(ペルソナ)」であるということ。肉体、精神、霊という要素を持ち、神との人格的な関係に生きるべき存在であるということを表しています。人格であるということそのものが「神のかたち」としての人間の尊厳であり、病気や障害を持っていたとしても決して損なわれるものではない。最も基本的な「神のかたち」、それがペルソナであるということです。

第二に「関係的な存在」であるということ。人間が交わりを求めるところに、ご自身のうちで愛の交わりを持っておられる神の性質が反映されていると言われます。完全な統一体であられる神の中で一糸乱れぬ愛の交わりがある。父、子、聖霊なる神としての、切っても切れない関係がある。この神との関係を構築すべき存在として造られた人間は、人と人との関係のうちにも愛の交わりを求める。人は、その漢字が表すように、愛によってもたれ合いつつ生きるべき存在とされている。

第三に「地を治め管理すべき存在」として造られているということ。本来の地の管理者は神ですが、神の意思によって知恵が授けられ、神の代理として地を治めるべきものとされた。住むことが許されている世界を大切にし、これを育み、神の計画に基づいて心からの配慮をもって養うべきものとされた。これが「神のかたち」の三つ目の側面です。

「ペルソナ」「交わり」「管理者」という三つの要素が、神の本質を映し出し、人間が如何に尊い存在として造られているかを表している。これが聖書的人間観の原則であります。その意味において、人間に具わった「美」も、神のうちに完全に備わった美しさを反映していると言えるのですが、それを表そうとすると、時の芸術は常に苦悶してきました。その世界観から神が消えるとき、芸術は最終的な到達点を見失ってしまうのかもしれませんが。ルネサンスの芸術がリフォーメーションに置き換えられたところにも、その意味が隠されているでしょう。そして、現代美術が描き出す破滅的人間観もまた、「神のかたち」を見失った人間の悲劇が反映されていると言えないでしょうか。芸術は「怒り」「欲望」「虚無」をも表しうるもので、時に悪魔的な要素が入り込む危険性もあるものです。そこには「歪んだ美」が表現され、かえってそういうところに異様な魅力を見出す人もいますでしょう。

ホンダマモルさんの作品を見つめると、その絵の背後に込められた「神と作者の関係」が見出されます。人として経験してこられた苦しみや悩みが丸く柔らかな曲線で描き直され、そのような曲線に変わった原因としての神がさりげなく映し出されています。そこには人生に対する怒りや呪いはなく、神との人格的な交わりによって一つひとつの苦勞を乗り越えつつある作者の姿が見出されます。すでに乗り越えたものも、まだ未解決のものも、すべてをありのままに表現することができるのは、人生全体を神の御手にお任せしたマモルさんの信仰によるものなのでしょう。そのように生きていくとき、苦い思い出さえもそのトゲトゲが和らげられ、主の慰め、赦し、慈しみの下に置かれるのではないのでしょうか。勝手な解釈ではありますが、私の目にはそのように映っております。

先ほど説明させていただいた「神のかたち」の三つの原則は、組織神学の中で必ず学ぶことでありますが、それが自分自身の中で受肉するためには、何らかの表現手段が必要ではないかと思っています。マモルさんにとっては絵画であります。私たちにっては何でしょうか。

少し現代音楽にもふれておきたいと思います。この時代の「悲観主義」「断片化」という特徴は、もちろん当時の音楽にも現れていました。古典音楽はドイツとフランスの二つの流れに分かれましたが、ドイツ音楽における最初のズレはベートーヴェンの最後期の作品「弦楽四重奏曲」に見出されると言われています。それ以前の音楽とは明らかに異なる要素が出てきている。「12音技法」という、過去の音楽の伝統を完全に排斥したシェーンベルク(1874-1951)の出発点がベートーヴェンのこの作品にあるというのです。また、ストラヴィンスキー(1882-1971)も「この四重奏は私の音楽的信念の最も高度なテキストである」と言っています。「12音技法」は「解決のない永久の変化」という意味であり、「聖書的基盤の上に多様性としかもいつでも解決のあったバッハ音楽とは、鋭い対照を見せている」(p. 191)。まるで解決のない旅のような現代音楽は、聞く側の見識と理解がなくては「耳障りの悪い」雑音の連続でしかありません。

私はある現代作曲家のオルガンコンサートに行ったことがあります。最初から最後まで

で延々と続く不協和音に耐えがたい感覚を覚えました。しかし、その所々に現れる美しい和声と旋律は、まるで天国のような響きを感じたのを覚えています。混沌の中に現れる真理のようなものが表現されていたのかもしれませんが。

現代音楽のもう一つの流れはフランスであり、その第一人者となったのはクロード・ドビュッシー (1862-1918) です。「彼の方向というのは非解決というよりも断片化の方向であった」(p. 192)。この世界観は、「この宇宙は偶然によってできたものである」という信念に基づくもので、この道を追求していくとあらゆる偶然的な要素を作曲の中に取り入れていくこととなります。ジョン・ケイジ (1912-1992) が試みたことをご紹介します。

「時々、どのような音楽にするかを決めるためにコインをポイと放ったりしたし、別の時には、偶然運動によってオーケストラを指揮する機械を組み立てたので、オーケストラの団員は次にどんなものがあるのか分からないということもあった。又彼は同じオーケストラに二人の指揮者をついたてて隔てて配置したりしたのでひどい混乱が生じた。」(p. 194)

ここまで来ると、音楽は秩序を失い、カオスの状態になります。リズムの乱れ、旋律の破壊、調和の喪失……。

「結局彼が偶然という方法を使うやいなや単なる雑音のみが結果として出てくるのであった。」(p. 194)

絵画は視覚を通して、音楽は聴覚を通して人に何かを訴えかけます。芸術はひとたび秩序を破壊するところにまで進んでみたのですが、帰るべきところを再び求め始めた。その「帰るべきところ」とは何であるか。この世界に秩序をもたらした神であるというのが、この本の結論だと思われます。

「キリスト教の基盤の上では、音楽は何故語るのかを理解することができる。人間は偶然の産物ではない。人間は神のかたちで創造されており、この基盤の上で音楽が何故人間にとって音楽であるのかを理解することができる。啓示——聖書とキリストを通しての神の啓示——の基盤の上では、宇宙に究極の沈黙はない。そして人間的価値と道徳的価値の確実性、そして幻想と空想とを区別する種類分けが存在する。人間が何故人間であるかという理由が存在する。しかしヒューマニズムの立場を取る現代人にとっては、それらの事は理解できない。」(p. 202)

今日は「現代美術」「現代音楽」の背後にある哲学をご紹介します。聖書的人間観の土台となっている「神のかたち」を振り返りました。私たち一人びとりの人間が尊い存在として造られているということを思い起こしたい。しかし、人は混沌の中に生まれてきます。「神のかたち」が自分のうちにあるということを知らずに人生を歩み始めるのです。そして、自分の中で秩序の崩壊が起き始めていることを知ります。神なしに生きるときに、人は「怒り」「欲望」「虚無」といったものに支配され、時にはそこに安住することさえ求めるでしょう。しかし、神と出会い、本来の秩序がこの人生に取り戻されていくとき、私たちは自分が「神のかたち」に造られているということをよく理解できるようになっていくのです。そして、

自分がどんなに尊い存在として創造されたかという、真の自尊心を取り戻していくことができるでしょう。午後の展示会では、マモルさんと神との関係を見出していただければ幸いです。

【祈り】

混沌の中に秩序を、闇の中に光をもたらし給う、天の父なる神様。私たちの人生は、自分でも気づかないところでカオスに飲み込まれ、倫理的な闇に支配されているものです。そのことにすら気づかずに歩んでいるのです。しかし、聖書を読み、神との関係が喪失した自分に気づいたとき、救いを求めるようになりました。人は闇さえも愛する傾向がありますが、光のうちに招き入れようとしておられるあなたの語りかけに、素直に従いたいと思います。私たちの人生には様々な痛みや傷が伴いますが、それらすべてを光とし、益としてくださるあなたの御手の中で歩ませてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
無から有を創造し、虚無にいのちを与え給う、父なる神の愛、
逆巻く波を治め、弟子たちの心に平安を与え給うた、主イエス・キリストの恵み、
光のうちへと招き入れ、神のかたちを取り戻させ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。